

小児血液学会造血細胞移植委員会あとがき

2006年から始まった移植登録一元管理プログラム(TRUMP)が稼働して、今年で4年目を迎えることになりました。紙ベースで蓄積された膨大なデータをTRUMPに変換するにあたって、日本小児血液学会造血細胞移植委員会事務局と日本造血細胞移植学会データセンターが果たされたご努力には心から敬服しております。わが国の移植データが世界に向けてより広く発信されるための基礎となる事業であり、一人一人の先生が現場で診療しながらコツコツと積み上げてきた実績が、大きく開花する時期を迎えたと言っても過言ではないでしょう。

小児白血病においては化学療法の著しい進歩と予後因子の同定によって、造血細胞移植の適応が限定されるようになり、移植症例数は減少する傾向にあります。1999年から2001年の3年間の平均移植症例数は280例でしたが、2006年から2008年の3年間における平均移植症例数は213例と、約70例も減少しています。造血細胞移植は化学療法よりは生活の質が低下することが一般的であり、移植なしで治癒する方が成長発達途上にある小児においては望ましいことと言えます。一方、移植の適応とされる症例はよりハイリスクの病型と限定されるため、移植成績はかつての成績よりも低下することさえあり得ます。

しかしながら、小児血液医の造血細胞移植に対する熱意は決して変わることはなく、よりすぐれた成績、より高いQOLを目指して日々研鑽を積んでおり、今後の造血細胞移植の目指すべき方向を探る上でも、従来の成績を詳細に解析する必要があります。登録例における14歳までの小児移植例の割合を見ると、全移植では40898例中7760例の19%ですが、移植細胞腫類別では血縁骨髄移植の8286例中2210例の27%、非血縁臍帯血移植では3377例中938例の28%を占めています。疾患別では、ALLの6446例中2202例の34%、再生不良性貧血の1447例中530例の37%、固形腫瘍に至っては3662例中2014例の55%を占めています。このように、小児例の解析に限定しても、多くの知見が埋もれていると推測され、学会員の積極的なデータの利用が望まれます。

2010年からは造血細胞移植登録一元管理委員会のもとで、テーマ別解析ワーキンググループが発足しますが、小児血液学会造血細胞移植委員会やJapanese Pediatric Leukemia/Lymphoma Study Group (JPLSG)のSCT委員会、疾患別治療研究委員会などの委員を中心に、より広く社会に還元できる、あるいは前向き治療研究につながるような解析結果が報告されることを期待しています。

小児血液学会造血細胞移植委員会委員長 矢部普正
小児科事務局 神奈川県立こども医療センター
田渕 健、小松崎和子、長野明美、気賀沢寿人

骨髄移植推進財団あしがき

日本骨髄バンク（JMDP）は1991年に設立され、1993年から非血縁者間骨髄移植がスタートしました。JMDPを介した移植件数は、その後右肩上がりが増加し、2008年12月には10,000例に達しました。JMDPを介した非血縁者間骨髄移植例はほぼ全例が登録されており、この精度の高さは他に類を見ない誇るべきものであります。この成果は、超多忙な認定移植施設の先生方のご理解・ご協力と骨髄移植推進財団移植調整部、データ管理事務局の三位一体となった努力の賜物であります。改めましてこれまでのご努力に感謝申し上げます。

JMDPの移植成績の最初の報告書は1996年でした。その後、HLA遺伝子型適合度や追跡調査の解析結果を、2008年まではほぼ毎年発行してまいりました。これまでの報告書は、日本における非血縁者間骨髄移植の基礎データとして、移植現場での患者さんへの説明や治療法選択の参考資料として広く活用されてきました。

一方、2006年から始まりました日本造血細胞移植学会の一元化登録システムにより、JMDPを介した非血縁者間骨髄移植のみならず、小児領域、成人領域の血縁者間移植やさい帯血移植など、国内で実施されるすべての造血細胞移植例が同一データベースで作成、管理されるようになりました。その結果は、昨年からのデータ一元化に伴う共通の報告書として発行されています。

移植医と患者さんが長らく待ち望んでいた移植ソース別の治療成績の比較などが、データ一元化により容易に行えるようになりました。さらに充実したデータベースの作成が、より安全な移植法の確立や移植成績の向上に不可欠であります。患者さんにご家族のQOLの改善のために、骨髄移植推進財団は今後も努力してまいります。

2010年4月

骨髄移植推進財団 データ・試料管理委員会委員長 河 敬世
データ管理事務局 川瀬孝和、森島泰雄
移植調整部 小川みどり、小瀧美加

日本さい帯血バンクネットワークあとがき

日本さい帯血バンクネットワークは1999年に発足し、累積の非血縁者間臍帯血移植件数は2009年12月に6000件に達し、昨年の臍帯血移植件数は891件と増加の一途を辿っております。また非血縁者間骨髄移植件数も年々増加しており、この両者によって患者様への非血縁者間移植の機会がさらに増えつつあると考えられます。このように多数の臍帯血移植の実施が可能となったのもひとえに臍帯血を提供して下さる妊婦さんと産科病院の先生方、並びに全国11ヶ所の臍帯血バンクおよび約200の登録病院の移植医の先生方の多大なご協力の賜物であり、ここに厚く御礼申し上げます。これまで臍帯血移植の臨床経過の報告様式につきましては移植医の先生方に100日報告の調査票へ記入、もしくは2006年以降はTRUMPへの入力もお願いしておりましたが移植医の先生方からの要望を受け造血細胞移植登録の一元化に極力沿うように現在作業が進行中で、近日中にアナウンスの予定です。今年度のTRUMPのバージョンアップをしていただく7月以降は臍帯血移植データをTRUMPに入力した後にwebで学会データセンターに送付できる形となります。また移植データに関する臍帯血バンクと移植病院とのやりとりも臍帯血バンク間の差異を均一化させていただく予定です。これまでの日本さい帯血バンクネットワークへの御協力に感謝申し上げますと共に今後共御支援くださるようお願い申し上げます。

日本さい帯血バンクネットワーク 移植データ管理委員会

加藤剛二、長村登紀子、熱田由子、磯山恵一、大西康、小田慈、
甲斐俊朗、加藤俊一、神前昌敏、幸道秀樹、谷口修一、村田誠

データセンターあしがき

2009年度は造血細胞移植登録一元化・電子化4年目となりました。骨髄バンクおよび臍帯血バンクネットワークの報告書をあわせた形の報告書になって2年目を迎えます。本年度も成人領域177施設、小児領域80施設と多くの施設からデータのご提供をいただきました。日本の造血細胞移植登録は精度が高いと世界でも評判ですが、これもひとえに移植施設のご努力とご協力の賜物であります。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

登録に用いております造血細胞移植登録一元管理プログラム(Transplant Registry Unified Management Program, TRUMP)については、大きな修正もなく安定して動作してきています。データ破損を防ぐためCRC(Cyclic Redundancy Check)を組み込みました。このためのエラーが出るがありますが、不都合がありましたらデータセンターまでご一報いただければ幸いです。今後もTRUMPの安定動作、機能強化に努めて行く考えです。皆様の標準データベースプログラムとして使っていただきたいと思いますので、ご意見・ご要望がありましたらデータセンターまでお寄せいただけると幸いです。

一元化以前に紙ベースで調査していた時代のデータをTRUMP形式に変換する事業については、残すところ臍帯血バンク分のみとなったと昨年度も書きました。これに関しては遅れておりましたが、2010年中には変換・返還できる見込みです。臍帯血移植のデータ収集に関しましても、移植施設から見ると骨髄バンクと共通の方法に移行することが決まっております。造血細胞移植登録の一元化も2010年をもって完結となります。

今後はこのため、集積したデータのクリーニングにも尽力したいと考えています。既に一部作業を開始していますが、同一症例が2回登録されている重複症例のチェックを行っています。また、造血細胞移植としては基本的なデータであるドナー情報、年齢・性別、疾患名などが欠損しているものも時にみられます。これらをデータセンターで洗い出し、施設に再入力や修正などをお願いする機会も多いと思います。データを組織的に解析すべく、ワーキンググループ(WG)の募集も始まりました。こういった解析にはデータの質が重要ですので、何卒よろしくお願い致します。

最近盛んになってきている海外との連携に関しても、Asian Pacific Blood and Marrow Transplantation Group (APBMT)を通じたアジアのデータ収集、米国CIBMTRおよび欧州EBMTとの国際協力に関しても、日本の役割は大きいと考えます。こういったプロジェクトに関しましても、引き続き皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

日本造血細胞移植学会データセンター

名古屋大学医学部造血細胞移植情報管理学 鈴木律朗、兵 理絵、熱田由子
血液疾患臨床研究サポートセンター(C-SHOT) 坪井秀樹、黒川哲二、倉田美穂、
伊藤千佳、酒井孝子、宮園美千代